

1-C-4 呼吸管理中、腹臥位が肺酸素化能改善に有効であった2症例について

東京医科大学八王子医療センター 麻酔科 *看護部 **ME部

池田一美、池田寿昭、杉 正俊、石井脩夫、*松永直子、*高草木伸子

栗原真由美、山下一好

我々は人工呼吸管理中、腹臥位が肺酸素化能の改善に有効であった2症例を経験したので若干の考察を加えて報告する。

症例 1 72才男性

既往歴 糖尿病

主訴 呼吸困難、乾性咳

現病歴 平成6年10月より主訴が出現し、11月1日当センター内科を受診し、胸部レントゲン上びまん性すりガラス状陰影がみられ、間質性肺炎との診断で入院となる。ステロイド療法にて一時肺炎は改善するも11月14日には再び呼吸困難増強しチアノーゼを認めた為、ICU入室となる。

ICU入室後の経過：直ちに気管内挿管をしてIPPVを行いステロイド療法を行うも著明な効果はみられず、ICU入室第4病日より1日3時間、4日間腹臥位とする。肺酸素化能（以下P/F比）は87から260へと著明に改善し、PaCO₂に有意の変化は無かった。呼吸モードはSIMV+PSVとして、第10病日には鎮静剤投与を中止としてレスピレーターより離脱した。第14病日には抜管をして胸部レントゲン上、肺炎は改善しており一般病棟へ転棟となった。

症例 2 70才男性

既往歴 糖尿病

主訴 発熱、呼吸困難

現病歴 平成7年2月より主訴出現し3月9日当センター内科受診し肺炎との診断で抗生剤投与するも呼吸困難増強した為3月16日HICU入室となる。

ICU入室後の経過：直ちに気管内挿管をしてIPPV開始する。胸部CTでは間質性変化が強く間質性肺炎であるとの診断がつきICU入室

第4病日よりステロイド療法を行い一時軽快したが再び増悪し、第9病日より2回目のステロイド療法を行った。しかし肺炎は改善せず第18病日より1日3時間、8日間腹臥位とした。P/F比は102から253と著明に改善しPaCO₂に有意の変化はなかった。第27病日には鎮静剤投与を中止し、レスピレーターより離脱した。第35病日には抜管をし胸部レントゲンでも肺炎は改善し第41病日には一般病棟へ転棟した。

<考察>

当センターICUにおいては、人工呼吸管理3日以上で肺酸素化効率（P/F比）が150以下の症例、肺CT上背側に病変の強い症例、又は気管支ファイバーでS6～S10に分泌物の多い症例では積極的に腹臥位にする方針としている。方法としては完全鎮静下で1日3～5時間腹臥位としバイブレーターによる理学療法を施行した。腹臥位3時間後にはP/F比は著明に改善し、PaCO₂に有意差は無く、仰臥位にもどした後も肺酸素化能の改善は続いた。また喀痰の排出も増加し胸部X-P上の改善もみられた。これは腹臥位により背側の喀痰の排出が促進した事と、換気血流比不均衡が是正された為であると思われた。2症例とも70才以上という高齢で糖尿病を合併していたが腹臥位による血圧、心拍数の変化はみられなかった。

<結語>

人工呼吸管理中腹臥位が肺酸素化能の改善に有効であり、喀痰の排出も増加し有用な治療法であると思われた。